

符尾の向き



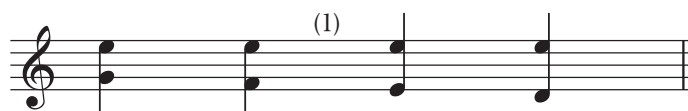
上例はハ長調の音階ですが、符尾の向きを示す好例です。五線の第3線、つまりト音記号ならシの音にあたる所が境界線となり、それより下の音なら符尾は上向き、上なら下向きとなるのが原則です。第3線上のシ音は中立のようにも思えますが、下向き優先とするのが現在の浄書規則です。

その符尾の長さは1オクターブ分ですが、最高音のドをよく見ると、両隣のシと同じになっています。これは、「どの符尾も第3線から離れてはならない」という規則に沿ったもので、上向き下向きともに、第3線に接触するように伸ばされます。作曲家の方々の手稿譜をずいぶんと見てきましたが、本例

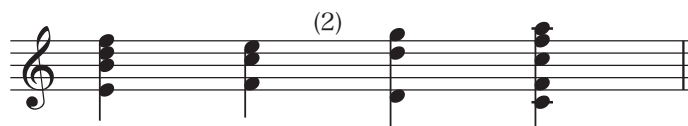
のような符尾の上下については規則通りでも、3線接触のための伸長が施されていることは稀です。見慣れた姿ながら、楽譜浄書を研究している人にしか意識されないものと言えるでしょう。

以上については Finale デフォルトに任せておいて OK です。普通は特に調整する必要もありません。なお、「符尾」という言葉ですが、楽譜ソフトの Finale や Sibelius 等で用いられる定義でして、必ずしも普遍的とは言えません。「符棒」や「符幹」とする楽典書もありますが、次回解説予定の「連桁」と同様に、我が国の楽譜術語には曖昧なものが多いです。

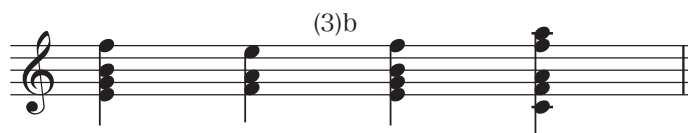
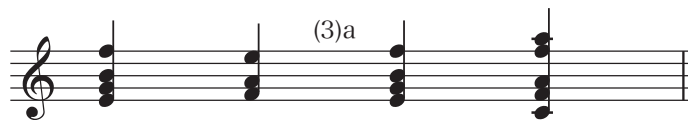
和音になると事情は異なります。譜例 (1) では上下の音のどちらが第3線から遠いかによって向きが決まります。2つ目のように等距離なら、「中立は下向き」の原則通りに下向きとするのが標準です。



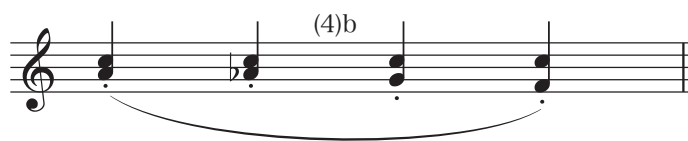
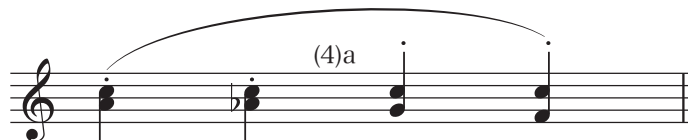
(2) のように音が増えてくると新たな基準も導入されてきます。最高最低音は等距離ながら、過半数の音が第3線より上にある為に、中立下向き原則とは関わりなく下向きとするものです。



(3)a の例が分かりやすいでしょう。(2) と同じく最高最低音等距離で、今度は過半数が3線より下にあるので上向きとなります。Ted Ross 氏の著書にある譜例で、この場合は第3線上のシは中立として勘定するわけですが、それも同数なら下向きとなるでしょう。そして、これは Finale 使いにとっては要注意です。この場合でも Finale デフォルトは (3)b のように下向き符尾を出してきます。符尾に関するプログラムが「過半数基準」を持たないことにより、「中立下向き原則」が適用されるからです。



浄書規則の多くと同様に、符尾の向きにも鉄則はありません。これは奏法表記を伴う時に更に明らかとなります。符尾の向きの規則に固執すれば、あるいは逆に無頓着にデフォルトに任せておけば、(4)a のようなノンレガート表記が雑然と見えてきます。ここは原則から離れて、(4)b または (4)c のように向きを揃えてしまった方が視認性が良くなります。(4)c の場合は3つ目と4つ目が明白な規則違反ですが、スタカートとスラーのバランスが良いので、私なら、これを採用します。



符尾の向きを反転するのは実に簡単で、高速ステップで選択後に L キーを押すだけです。もちろん、操作そのものは簡単でも、的確にそういった調整をなすには専門知識と実務経験が必要となります。

